

電子メールのある暮らしを求めて

文学部行動学科 助手 積山 薫

私は今年5月に金沢に赴任したが、それまで2年ほど、ATRという電気通信の研究所に勤めていた。この研究所は、おそらく日本の最先端に行くコンピュータ環境が整っており、文科系出身の私にとってはとてつもなく刺激的だった。世の中の人には、コンピュータを使う人と使わない人の2種類に分れるのだと言う。大学院時代はパソコンをワープロがわりに使う程度だった私が、コンピュータは研究生生活の必需品であると言う側の人間になったのは、その研究所勤務を通してだった。

必需品と言っても、コンピュータの使いみちは色々だから、人によって何が重要かは異なるだろう。私の場合、心理学の実験でデータを整理したり、統計的処理を施すのに便利なのはもちろんだが、金沢へ来て最も必要性を感じるのは、電子メールだ。研究者の間では、電子メールとは言わず、イーメール (e-mail: electronic mailの略) または単にメールと呼ぶことが多いようだ。そして、アメリカでは今や普通の郵便のことを、かたつむりメール (snail-mail) と呼ぶような。読者の中に、イーメールをお使いの方はいらっしゃるだろうか。

イーメールの威力を私が初めて実感したのは、去年の秋、就職先を探している時だった。学閥もなくしかも女性である私には、日本の大学に就職することは不可能に思えた。そこで、自分の分野に関連がありそうなアメリカの研究者に、片っぱしから求職の手紙 (普通の郵便) を書いた。履歴書にイーメールのアドレスを明記しておいたところ、1人の研究者がイーメールで返事をくれた。その時私はコンピュータ上で仕事をしていた。1行入力してふとディスプレイを見ると、"You have a new mail." というメッセージが現れたので、mail と入力して差出人を表示させると、どうもカリフォルニアのある研究者らしい。その時のドキドキしたことは、今も忘れられない。メールの中味は次のようなものだった。"I am strongly interested in having you work with me." えーっ? 郵便ポストへ手紙を投函してからたった5日目なのに、もうアメリカから返事がきたの? しかもこんな脈のありそうな返事。どうやら先方は郵便を受取ったその日にイーメールを打ったらしい。打込まれたメールは、その日のうちに日本へ到着したのだ。差出人の住むカリフォルニアのサンタクルーズを私が訪ねたのは、それから1か月後のことだった。

アメリカで仕事したいという希望はとりあえず実現せず、私はいま金沢にいるわけだけれど、金沢にいたって、イーメールさえあれば、アメリカの研究者と毎日でもコミュニケーションできるのだ。金沢へ来る早々から、私はメールを使いたい! と痛感した。なぜなら、研究仲間は皆、遠く離れた地にいるからだ。メールがあれば、以前の職場にいる共同研究者でも、アメリカにいる研究者でも、隣にいるようなものだ。思いついた時にコンピュータの端末でチョコチョコと手紙を書いて送れば、相手は好きな時に読んで返事をくれる。便箋も封筒も切手も飾る言葉も用意しなくてよいし、国際電話

やテレックスよりはるかに安く、かつ速く情報が送れる。送受信した情報は、コマンド1つで紙にプリントアウトしたり、ファイルにしまったり、他の人に転送したり、自由自在だ。

というわけで、金沢大学で電子メールを使うにはどうしたらよいのかを、6月、7月と検討し、環境作りを試みていた。まわりに電子メールを使っている人はいないし、金沢大学はjunetに入っていない。junetとは、日本国内の大学や研究機関のUNIXをOSとするマシンを接続した電子メールのネットワークだ。そこで、まず共同利用で東大のUNIXマシン"tansei"にアクセスしようと考えた。東大に利用申請し、だいぶ待って利用承認書をうけとったが、それから東大センターにたびたび電話して疑問点を詰めていくうち、"tansei"には大学間ネットではアクセスできず、電話でアクセスしなければならないことが分った。あーあ！交換手を介する電話しかない大学の状況（角間移転前）では当面だめだし、それに研究室の予算は乏しいから、東京までの電話代がかかるのも癪にさわる。

次に考えたのは、京大経由でBITNETを使うことだ。BITNETは、IBMのマシンを主体とする電子メールのネットワークである。京大がそのサービスを開始したことを、少し前に耳にはさんでいた。そこへ舞込んだのが、京大から講師が金沢にきてBITNETの講習をしてくれるという金大センターの案内だった。渡りに舟で9月6日に受講してみると、今まで誰も教えてくれなかったBITNET上のメールの使い方が、ほぼ完璧に分ったではないか。BITNETでメールを使うには、金大センターの端末から大学間ネットで京大センターへアクセスすればよいから、電話代はいらない。それに、BITNETに入ってしまうとメールの送受信料は無料である。

だがしかし、1つ問題がある。私の友人には、junetにぶらさがっている人が多いのだ。以前いたATRでは、国内はjunet、海外へはuunetを利用していた。もし自分のアドレスがBITNETにあって、junetのアドレスへメールを送りたい時はどうするのだろう。これがアメリカなら、いくつかあるネットワークがアメリカ国内で相互につながっているから大丈夫だ。だから、日本のBITNETのアドレスからアメリカのどのネットワークへも送れる。しかし、日本国内では、junetなどBITNET以外のネットワークへ送れるかどうか、教えてくれる人はそれまでいなかった。

この点について、講師の方はjunetへも送れると、口ごもりながらおっしゃった。BITNETとjunetとは、ハード的にはどこかでつながっているらしい。しかし、講師の先生いわく、それは公に大きい声では言えない、と。メールが正しく配送されるためには、配送状況を管理する人が必要であるが、BITNETとjunetの間にはそのような義務をもった人がいないのに、ハードでつながっているところがある、ということなのだろう。

さっそく、富士通の研究所にいる友人（アドレスはjunet）にイーメールを打つ約束をした。そこで、角間新校舎でセンターの端末を使おうとしたら、センター分室は閉っていた。というわけで、9月中旬の現時点で、まだイーメールを使い始めていない。だから、BITNETの使い勝手がどの程度のものか、読者にお知らせできないのが残念である。もしjunetとのやりとりがスムーズにいか

ないなら、やはり "tansei" なりどこかの junet のノードへアクセスしなければならない。ついでながら、その講習会でわかったことは、京大も UNIX マシンのサービスを開始し、これは junet に入っているらしい。しかしこのマシンも大学間ネットではアクセスできず、電話回線でアクセスしなければならない。ただ、東大 "tansei" は電話といっても DDX-P という第 2 種パケットであることが必要だが、京大の UNIX マシンは普通の電話回線でよいそうだ。その辺の違いが機能的にどういふものなのか、私はまったく分らないので、どなたかお教えてください。それと、工学部のどこかで UNIX マシンをお持ちの研究室があったら、ぜひ junet に加入しましょう。

電子メールは、大学や非営利の研究機関を結ぶ研究者間の情報交換の手段だ。金沢のように他の都市と隔絶された街にあっては、電子メールはきっと重要な役割を果すと思う。だって、研究が一人よがりにならずに発展するには、他の研究者との議論、切磋琢磨が不可欠なのだから。金大では、まだ電子メールを使っている人が少ないように感じる。これを読んだ方、1 度私にメールをください。アドレスは、D33785 です。もっと正確には、D33785@jpnkudpc.bitnet です。

BITNET を起動するには、NVT KYOTO で京大へつないでから、KBITNET とキー入力すれば良いのです。メールを送るコマンドは、M 相手のアドレス、です。まあ、同じ大学にいながらわざわざ京大経由でコミュニケーションするのも変な話ですが、他学部の方との情報交換を強く希望しています。他学部との交流があってこそ総合大学のメリットがあるというものです。それに、金大センターにぶらさがっているという意味では、同じ問題をかかえているはずですから。それにしても、文学部の計算機環境は淋しい。

BITNET は、もともと IBM が自社の製品を売るために開始した無料の情報交換サービスで、大学を中心に普及した安上がりのネットワークである。その分、有料である他のネットワークに比べて、事故に対するサポートがなされない、という短所もあるのだそうだ。最後に、BITNET とはいかなるものか、京大センター遠隔地講習会の資料から紹介しておく。・・・BITNET (Because IT's Time Network) の歴史は、1981 年 5 月にニューヨーク市立大学とエール大学が接続され、サービスを開始しました。その後、アメリカ国内の大学に、次々と接続されていきました。そして、1984 年 1 月にはイタリアにも回線が伸び、ヨーロッパに広がり、同じ年の夏にはカナダへも接続されました。日本国内では、1985 年 5 月に東京理科大学が接続されたのが最初です。その後、1987 年 4 月には台湾の文部省大型計算機センターが接続され、1988 年 2 月には韓国のソウル国立大学と接続されるなどアジアにも広がっています。BITNET は、毎月 30 を越える計算機が新規に加入するなど、どんどん広がっています。1988 年 11 月現在、日本国内では、24 大学、10 研究機関の計算機 50 台が接続されています。・・・この近くでは金沢工大や富山大が加入しているそうである。金大も早く加入してほしいものだ。